
キャパシティ・ワールド―能力者達の世界―

久留間水樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キャパシティ・ワールド―能力者達の世界―

【Nコード】

N7380Y

【作者名】

久留間水樹

【あらすじ】

「君女顔だから女の子ばかりのチームね」「なんでだよ!」「レベル高い子ばかりの<チーム>にいたらレベル上がるでしょ」「そんな無茶苦茶な!」そんな先生のむちゃぶりに翻弄されて超強い能力者たちの<チーム>のリーダーにされた僕。ただの無気力少年だったのにツツコミ技術を手に入れて(これは関係ない)ヤンデレ義理妹とか僕を主と慕う無表情系少女とか個性豊かすぎて困るメンバ―と日々頑張るお話。僕超頑張ってる。

第1戦 ヤンデレ義理妹、今日も元気に殺し起こし。

1

「ぐげぼ」

朝の目覚めの原因は脇腹にくる鋭い痛みだった。……勿論、腹痛なんかじゃないけど。というより朝の第一声が”ぐげぼ”はどうなのだ自分よ。

あまりの激痛に動けなくなり、数秒、固まる。その間にもう一回、もう一回とテンポ良く（されても困るけど）脇腹に痛烈な痛みが襲いかかった。

「兄様、おはようございますの時間なですよ」

鈴のような声が頭上から降りかかってきた。っていうか痛い、本気で痛い。

反応がないことに怒ったのか、もう一度脇腹に衝撃が走る。僕は決死の覚悟で体を起き上がらせた。

「起きてる！起きてるから！」

「なんだ、なら早く目を開けてくれたら良かったのになのです」てめへのパンチで起き上がれなかったんだよチクショウ。

あまりの痛みに意識が飛びそうになりながら、しかし今ぶっ飛んだら確実に殺される——比喻じゃないことが恐ろしい——のがわかってるので、必死に意識を保ちつつ、「おはよう」と声をかけた。

「おはようございますですよ、兄様」

にっこりと微笑むのは僕の義理妹だった。ふむ、本日も目麗しい。

僕の一つ下の義理妹の名前は枷かせ薙なぎ葦いげつ月。つまり必然的に僕の苗字も枷薙ということなのだが、それはどうでもいいことだ。今必要なのはこいつが僕の義理妹という点で、そして現在手にナイフを——

……、何？

手に、ナイフ？

「うわああ！？」

「兄様、毎日のことなんだが驚かなくてもいいですよ」驚くよ普通は！

でも言われてみれば確かにそうだった気がする。でも仕込みナイフをしているからといって今それを振り上げたまま腕を固定させている意味はどこにあるのだろうか。

僕はすーはーと深呼吸してから尋ねる。

「つかぬことをお聞きしますが、葦月さん」

「？何なのですか？兄様」

「何故にそのナイフを振り上げたまま腕を固定させているのでしょうか？」

きょとん、と可愛らしく首を傾げたあと——おかしなことを聞きますすね的な表情で僕の方へ笑いかける葦月。

「それは勿論、兄様を殺すためなのですよ？」

「恐ろしいよこの義理妹！」

恐怖だった。まさしく恐怖だった。

笑顔で殺人宣言しちゃったよ……しかも義理の兄を！

この子の未来が不安になるなあと思いつつでも絶賛今も不安なのであった。南無南無。

とりあえずナイフをしまわせて（若干不服な顔をしたのにはスル―した）葦月とともにリビングへと向かった。おお、いい匂い。

この義理妹、僕をなにかと殺そうとしようとするとさえなければ完璧なのになあ……。顔だって悪くない。むしろいいくらいだ。いや、めちゃくちゃいいね。美少女という表現さえたりな「ぶげばっ！？」

また殴られた。

「兄様、なぜ早く食べないのですか？それはあれですか？私の料理が不味くて食べられねーよという反逆行為を表しているのですか？それならば容赦はしませんともええそうです食べ物粗末にしては

いけないという理論を振りかざして正々堂々殺してさしあげ「ちょっと待った」

なんでこいつはここまで思考が破綻しているのだろう。ていうか今のは思考に没頭してただけだろ。しかもお前が喜ぶようなことを。

と思ったものの口に出してはまた殴られるかなと思い（断じてこの義理妹に畏怖を覚えたからではない）、おとなしく朝ごはんを口にした。

数分でご飯を完食する。勿論美味しい。まあ美味しくなくても完食しなければやはり鉄拳がとんでくるのだろうが。

これが世に言うヤンデレなのだとしたら、こっちから願い下げだった。せめて、もう少しだけでいいからおとなしくはならないのだろうか……。いや、ならないだろうな。

「……では、兄様。お食事も終わったことなのですし、学校へ行きましょうなのです」

「……うん」今日は通学路で何回こいつから死の恐怖を味あわせられるんだろう。

でもまあ、こんな日常も悪くないっちゃ悪くない。

僕は学生鞆を持って、既に玄関へ向かってしまった義理妹の後を追いかけた。

2

「うん、君に来てもらったのには理由があるんだ」

「そりゃ理由がなければ誰も僕なんかを職員室に呼んだりはしませんよ」

僕の反論に、先生も「それもそうか」となにやらうんうんと頷い

ていた。

……うん、なんで納得してるんだろ。

そう、僕は今先生に職員室に呼び出されていた。正確には、担任の木野羣先生きのむらなのだが。

先生はパラパラと僕の成績表を見て、それからちよつとにんまりと笑った。……嫌な予感。

「あたしゃね、君にいい提案がある」

「却下します。……じゃなかった、お断りします」

「まあまあそう硬いこといいなさんな」

フツと不敵に笑う先生。

僕は顔をしかめて聞いた。

「どうせろくなことじゃないんでしょう?」

「いいや、君にとつて——というか、全男子にとつて羨ましい提案だと思うけど」

「……どういふことですか?」

先生はそこで、僕の成績をさらつと言いのけた。

「君の戦闘成績はこの学校に入学した中学1年生の時からずっと横ばい。最低ランクのF」

「……わかってるんだからわざわざ口に出さなくてもいいでしょうよ」

というか、この職員室にいるのは僕たちだけじゃないですよ?

僕が非難の声をあげても先生はどこ吹く風。それどころか、煙草まですいやがった。

……煙草、苦手なだけだな。

「いいこと? 君、確かに素行の面では優等生だ。優等生の優等生。どこの学校に行ってもそうだろうな。特に、この変人ばかりの学校なら特にそうだ。——だからこそ、この成績は可笑しいんじゃないかい?」

「……可笑しいって、どういふことですか?」

怪訝に思つて聞いてみた。

先生はすぱーと煙草を口から離し、綺麗な白い輪っかを嗜み程度に口紅が塗られた唇から生み出す。

僕は気づかれないように——それでもさっきよりも強く顔をしかめた。

「あたしやね、思ったんだ。君には、きつかけが足りない」

「きつかけ……ですか」

話がかめずにいると、先生は呆れたように目を半眼にした。

「そ。きつかけ。君には少なからず能力があるはずだ。じゃなきゃこの学校に入れなかったはずだろう？」

「……それは、そうかもしれないけど。でも、機械の誤算ってこともありえ——」

キャバシディ・ジャッジメント

「能力判定機」に誤算なんてない」

先生は言い切った。

……それは、たしかにそうかもしれないけど。

「……そこで、だ。あたしや、君に＜チーム＞を組んでもらうことにする」

「チーム、ってあの、＜チーム＞ですか!？」

「そ。あの、＜チーム＞。当たり前だが、君がリーダーだ。君の＜チーム＞候補者は、この紙に書いてある」

ぺろん。先生は僕に紙を差し出した。

僕はまごついて、それでもそれを受け取った。

「そこに書いてあるのは、能力が高すぎてハブられた——いわば、化け物ってことだね」

「化け、物……」

小さく、それを反芻した。

そんな人たちを統率するなんて馬鹿げてる。特に、——こんな僕には。

「という訳で」

先生はニヤ、と目付きが悪くなった。

「君女顔だから女の子ばかりのチームね」

「なんでだよ！」過去最高に話がつながっていない展開だなオイ！
「レベル高い子ばかりの＜チーム＞にいたらレベル上がるでしょ」
「そんな無茶苦茶な！」

反論しようと先生を睨もうとして——出来なかった。

先生は笑っていた。

何も、心配はいらないというように。

僕を、信頼しているかのような、その、目で。

「頑張れ。あたしゃ、応援してるよ。なんたって君は面白い。いくらだって可能性がある。だから——」

僕は声を出さずに先生の続きを待った。

先生はそこで——いたずらっぽく笑った。

「ヤンデレ気味の妹ちゃんを任せた！」

「は？」

ハッと思つてリストを見たら——きつちりかつちり義理妹の名前が載っていた。

……アイツ……。

「ついでに、妹ちゃんは君が選ぶものにもないからね。既に君の＜チーム＞に所属決定してるから」

「もう一回言つぞ！なんでだよ！」

僕こんなに教師に突っ込んだことねえよ！

「だって、君の妹ちゃんやばいんだよ？誰ともソリが合わないって
いうか……壁ばっか作ってるから、＜チーム＞組みにくいんだよね

」

「うつ……」

思い当たるところが有りすぎて黙ってしまった。

先生はそんな僕を見てまた笑う。

「ま、頑張れたまえ、お兄ちゃん」

「……………はい」

……ま、これも兄貴の勤めなのかもしれないしね。

ここで、僕ら兄妹の通う学校について一通り簡単な説明をしておこうと思う。

まず学校の名前だが、『戦士育成防衛機関付属学園』——略して、戦学。

そのままの学校名にそのままの略称名だが、それはまあ僕の知ったことではない。

で、この学校はその名の通りの学校だ。

現在平成26年。資源の激減、食料量の低下から他国との関係がギスギスしてきた日本には、やはり当然というか”武力を再び我が国に”という運動が120年程前に起こった。この運動を”武力再起運動”と言う。これにより——かねてから武力の確保を願いつけてきた役人が裏で後押しし——日本には再び武力が確保されることになった。

これを反対したのが米国や多数の”日本が武力をもたないことにより得をしてきた国”だった。しかし日本は反対を押し切り防衛機関を設立。

そして同時に日本の科学は更なる深みへと発展していった。いや、それが発展というのかは知らない。でも、国はそれを発展だと言いつ張った。

”超能力者”——そういうのが、正しいのか。

超人。それは火や風などの元素を操るといふ原始的なものから、フィールド透明の盾や精神的な干渉など様々な物に及んだ。

しかし、国の科学者が発見したのは”能力そのもの”ではない。

”人間の潜在的能力を引き出す薬”——”キャバシティブローム能力開花”だ。

これによって、世界は騒然となった。『人間は神の力を手に入れた』と騒ぐ宗教信者に『悪魔の力を手にした』と反論する市民、『

それは他国にとって深刻な不可思議な物質となる』と述べた大国の大統領など世間は様々な意見で反発しあったが、日本の答えはただ一つのみ。『——これは、武力である。』

つまり日本にとってこれは『力』であると認めたものだから、これまた世間は騒ぐ騒ぐ。世界大戦が起こらなかったのが不思議なくらいである、と当時の人々のインタビューを見ると誰しもそう言っていた。もしかしたらそれも日本の”能力者”が何か操作でもしていたのかもしれない。ともかく、日本への批判は高まった。その”薬物”の情報を提示せよ、とどの国も言った。

日本は最初はそれを嫌がったが、戦争が巻き起こりそうなことと自国だけでは生きていけないことを感じ、一部提示という形で騒ぎは収まった。

それが、僕達の歴史だ。

そしてその頃、戦学は誕生した。

キャパシテイ・ブロームを使い能力が開花すると判断された者——その判断をするのが先ほど話に出てきた”キャパシテイ・ジャッジメント能力判定器”だったりする——のみが入学できる特殊な育成学校。

小学校から高校までで成り立っていて、レベルはFからSSまで最低ランクがFで最高ランクがSSだ。

生徒は戦士、検索者、暗殺者など自身の能力にあった分類を選び、2人から5人編成で<チーム>を組み、”任務”を遂行する。

これが、戦学だ。

ついでに葦月はレベルSの凄腕戦士だ。鼻が高いのは高いのだがそんな戦士が毎朝脇腹を蹴ってくるのだから僕の痛みは実は尋常のものではない。

それにしても。

……あいつ、やっぱり人と、<チーム>組めてなかったんだなあ……。

僕は溜息をついて家路についた。途中、クラスメイトとすれ違い、挨拶をする。

「はあ、やつと家だ……」

僕は扉を開けようとして――ふと、その手を止めた。
何か、嫌な予感がする。

「……まさか、な」

例えばだが、もしもアイツが既に僕とくチームを組むことになったと知っていたとしたら？

……考えたくもない。

と、そこで勢いよく扉が開いて僕は中に引っ張り込まれた。

「うぎゃっ」

したたかに額を玄関の段差にぶつける。

犯人はまあ、分かっていた。

「葦月……」

「兄様！兄様遅いのです！もう、もうもうもう！！今日はお祝いデーなのですよ！？さあさあ早く席について！パーティーです！パーティーなのです！」

葦月はくると（額から血を出している僕には勿論気にもとめないで）回転してキッチンへと消えてしまった。

「……まあ、いつか」

色々文句をいうのもめんどくさい。そう、僕はめんどくさがりなのである。

靴をきちんと脱いで、僕はいい匂いのするダイニングへと歩いていった。

第1戦 ヤンデレ義理妹、今日も元気に殺し起こし。(後書き)

感想頂けたら泣いて喜びます！これから頑張って書くのでよろしく
お願いします！

第2戦 無表情少女は言葉が拙いようです。

1

葦月いげつはまず静かに壁を——いや、向むかこう側にある的を見つめた。慣れているはものの、いや、慣れているからこそ慎重に、葦月は動いた。

投剣。

各指の間にさしたクナイや短剣が葦月の動きにあわせて壁に向かって投げ出された。しかしそれは壁にぶつかるなどということは起きない。的と葦月の間にある障害物の壁を楽々通り抜けた。向こうで、ザクザクという的にクナイが刺さる音がする。

葦月はふう、と息をつき、そのまま投げたクナイと同じように壁を通り抜けた。そして数秒待っているとまた壁から戻ってくる。

「全部成功しましたなのです」

「それは良かったな」

僕が褒めると葦月は嬉しそうにニツコリと笑った。それはかなり魅力的で、僕のように毎日みて慣れていない人だったならば、数秒硬直して次の瞬間にはファンクラブの仲間入りだ。

実際に何人もそういう人を見てきたしな。

葦月の能力は先ほど見せたように、”透過視”である。物を物体の間を通り抜けさせ、自身の目も物体の間を通り抜け、向こう側を見ることができる。実際には暗殺者向きの能力なのだが、葦月はこれを駆使して戦士としての自分を確立していった。恐ろしい義理妹である。しかもそれでSランクの称号と”絶対透過の投剣姫”という二つ名までつけられているのだから、尚更感嘆する。

ついでに、今僕は葦月の能力練習の立ち合いをしていた。折角、

<チーム>を組めたのだからと葦月に強引に誘われたからである。そして、驚くべきことに実はここは葦月専用の連取所なのだった。最上級レベルAランクとSランクには個人の練習場が割り当てられる。相変わらず、すごい妹だ。

当の本人である葦月が満足そうな顔をしているので、今日ばかりは良しとしようか。……なんて思っていると、視界の先にクナイ、が、「危なッ」

僕はこういうところではばかり発揮される反射神経を使ってそれを避けた。

「……葦月、何が気に入らないんだ」そして何故クナイを投げるんだ。

葦月はクナイを投げ終えたポーズから寸分動かずこちらを睨みつけていた。

「兄様、これはデートなのですよ？密室デートなのです。デートデート」そこまでだ」

誰もお前とデートなんかしてねえよ。確かにこの練習場が（壁で隔ててあるために）若干狭いのは合ってるけど。

む、と葦月が頬を膨らませた。うむ、これもまた格別の可愛さがある。

「デートじゃなくて練習の付き合いだろ？」

「でも男女で二人きりで密室にいるんだから、デートに決まってるのですよっ！」憤慨したようにもう一度葦月はクナイを投げた。僕はさらにそれをよける。

僕は嘆息した。やれやれ、なんでこんな我儘娘に育ったのやら。

まあ多分大部分は僕にあると思う。甘やかしすぎたかな……。

「だったら汚い掃除用具箱の中に男女が二人でもデートなのか？」

「私と兄様の場合はもちろ「もういい」

第一掃除用具箱をデート場所に選ぶなんてどういう神経だ。僕はそこまで無神経ではない。

葦月はクナイを投げたことにより不満は少し減ったのか——僕の

寿命もちよつとだけ減った気がするぜ！——それ以上は何も言わず、ただこちらへと歩いてきた。

さて、練習も終わったみたいだし、本題にはいろう。

「葦月、＜チーム＞に入れるなら誰がいい？」「全員やです」

僕の隣にストンと腰を下ろした葦月はぷい、とそっぽを向いた。

……そう言われてもなあ。

僕は溜息を付いて葦月の方に顔を向けた。葦月は顔をそらしたまま、目だけこちらへ向けてくる。

さて、兄貴面をする場面かな。

「いいかい葦月？先生はリストを渡してきた。つまり、これは絶対葦月と二人じゃ駄目ってことなんだ。言ってる意味、わかるね？多分このまま誰も入れなかったら——僕の＜チーム＞は解散だ」ピク、と葦月の体が動いた。「葦月は僕の＜チーム＞ではなくなる。また他人の＜チーム＞に入らなきゃいけない。それはいや、だよね……？」

葦月は少しの間も開けずくくりと大きく頷いた。よしよし、この調子でいけそうだ。

「だから、誰か——出来れば早めに——人を入れなければいけない。だから「ヤ。」拒絶された。

何でだよ。

……こいつ、今の話聞いてたのか？

と思っていると、「でも、」と葦月は続きを口にした。

「兄様といられるなら、他人の女が居てもいい」

……他人の女って……。

ま、これでいいか。やっと葦月の賛同が得られたわけだ。

昨日のパーティーの後、いくらいつても聞かなかったのだから、僕としては上々だ。

「よし、偉いな」

僕が葦月の頭をなでると、葦月は嬉しそうに頭をすり寄せた。犬かこいつは。

しっかし僕も甘やかしすぎだなあ……だからといって厳しくするつもりは、毛頭ない。

だって葦月は、僕の大切な妹だから。例えそれが義理だとしても、だ。

「さてと」

じゃ、いつちょ仲間集めといきますか。

2

とは言うもののまず誰にするか決めていない。

僕はハッキリいつて無能——文字通り、無能——だ。なので葦月の能力と相性が良さそうなものがないだろう。

そうは言っても、葦月の能力そのものには物理的な物がないので、そういうのも心配なくていい。

だとすれば、何を基準にすればいいんだろうか。……顔？

いやいやいや。……一応言っておくが、どの子も美少女だった。

まあうちの義理妹には勝てないけどな！

と僕が心の中でスコンつぶりを発揮する。どちらかといえば親のような感情に近いけど。

ま、葦月にはまず合わない勝気そうな女の子はやめておこう。さすがに。

「……兄様兄様」つんつん、と葦月が僕の袖をつついた。「兄様はどの子がお好きなのですか？」

「……………えと、どうして？」

数秒躊躇って聞いた。葦月はふふ、と怪しげな笑いを浮かべて「まずそいつからぶっ殺しにいきますです」と恐ろしいことを言うてのけた。

うん。正直に答えてなくてよかった。

葦月はさつきからふふふふ、と笑いながらナイフの刃を研いでいた。……さつきの話、覚えているのか？

取り敢えず怖いので葦月は帰らせておく。

戦学には授業というものがない。いや、あるにはある。それはただ一つ、“戦闘訓練”のみ。入学当時は“能力”や“歴史”などを勉強させられるが、それも一ヶ月程度。すぐ終わる。その後は各自が自分にあつたと思う系統クラスに行き“戦闘訓練”を受け成長するのみだ。

それすらも終わらせてしまった義理妹とそれすら分からず色々放浪して投げ出された僕には特にやることがない。

なので、今帰らせても別になんの問題もないわけだ。僕が「今日は凝った物が食べたいなあ」と呟くと葦月はナイフを研ぐ手を止め、一目散に家へと帰ってしまった。今日の晩ご飯はさぞかし手が凝つたものだろう。まだ2時なわけだし。

そういうわけで一人になった僕は、一応目星を付けておいた女の子へ会いに行くことにした。

はじつかこあり
端塚古織。葦月の2つ下——つまり、中学1年生か。

AランクとSランクの中間に位置する（しかもその中でも上）有能中の有能の少女。ただ、言語能力に多少の弊害があり、とのことだそうで。

まあ、構わない。あつて話をしてみよう。

やはり有能だからかこの端塚さんにも練習場が割り当てられているみたいなので、今はそこへ向かっている。

そこは葦月の練習場からそうかからない場所にあつた。

「……ここか」

小さく、『端塚専用』と書かれたプレートがかかっている。ここに間違いない。

そう思つて扉を少し開け——の前に、扉を開かれた。

「……」

驚いて声を失う。いや、これは当然か。

扉の前に立っていた人間の気配など、戦士として気づいて当たり前、なのかもしれない。

勿論、普通の女の子としては落第点なのかもしれないが。

——そう、端塚古織が目の前にたっていた。無表情の、塊とでも言える顔だったが、それゆえに、美しい。

「……用」端塚さんが口を開いた。

「え？」

単語しか聞き取れなかったので、僕がそう聞き返すと、端塚さんはもう一度

「用」

と繰り返した。

……成程、これが言語能力の弊害ね。

ま、この程度障害にも弊害にもならない。

「君が端塚古織？」

「……」こくり、と頷いた。

「じゃあ、僕のくチーム>に入らないか？」

「……」ふるふる、と首を横に振った。

うん、断られたらしい。

じゃ、帰るか。

「そっか、じゃあ僕は帰るね」

そう言って来た道を帰ろうとしたとき、「え？」ぎゅ、と袖をつかまれた。

振り向くと、端塚さんの瞳孔が僅かに開いていた。

「あなた、わたしをごういんに、ちーむしない？」

ゆつくりと、確かめるように端塚さんは言葉を紡ぐ。

端塚さんは真っ直ぐに僕の瞳を覗き込んだ。

……やっぱり。僕は心の中で呟く。

「君、ずっと強引にチームにいれさせられてたんだ」

こく、と大きく端塚さんは頷いた。

「みんな、わたし、ちーむしたがる。だから、ちーむいれる」

つまり、彼女の能力は高すぎた。だからこそ、＜チーム＞に入らざるを得なかった。

葦月のように。＜チーム＞なんて、馴染めるはずのないものに。

「でも、あなたたちがう。……どうして？」

どうしてって言われても。「……なんとなく、かな」

何故か納得したのか、端塚さんは「……」と無言で頷いた。

……いつ、手を話してくれるのかなあ。まあ、可愛い子だからいいんだけどさ。

「……なまえ」

「名前？」

そうか。僕はこの子を知っているけど、この子は僕のことを知らないのか。

「枷薙。枷薙^{かせなぎ}篝^{かがり}だ」

「……かがり」

端塚さんは僕の名前を反覆して、それから2階、頷いた。

「……？」

それだけすると、端塚さんは練習室の中に入ってしまった。

「……なんか、不思議な子、だな……」

僕は呆然と、そう呟いた。

第2戦 無表情少女は言葉が拙いようです。(後書き)

感想・評価いただけたら嬉しいです！

第3戦 誘拐犯と任務のお達し。

1

放課後。

ついでに放課後まで何をしていたのかというとそれはもう何もしていなかった。ただ単に図書室で本を読んでいただけだった。

……いや、家に帰ると義理妹が怖いもので。

恐妻が居る臆病な夫の気分ってこんな感じなのかな、と少し戯言たわごとを思った。

そんなことを思っていると、端末に電話がかかってきた。

ここで説明しよう！端末とは携帯機能（からいろいろさらに発展した機能も追加された）肌に直接付ける型の小型機器なのである！
「なんのキャラだよ」

僕は自分の思考につっこみながら耳につけた端末のボタンを押した。

「はい、枷薙で『君ッ！君君君——ッッ！！』」

先生だった。ていうかうるさい。

音量のボリュームが自動で下がったらしい、先生の慌てた大声が普通の声程度になった。ただ、先生の周りの人は迷惑だろうけど。

「何があつたんですか？」

『端ッ端塚ッ！端塚古織がッ！……！』

次の瞬間、僕の耳に届いたのは、ありえない台詞だった。

『端塚古織が、誘拐されたんだ！』

2

ランクA（しかも細かく表記するならランクA+）の戦士が誘拐されたとなつて、教師軍は騒然となっているらしい。

……僕の義理妹じゃないことを祈るばかりだ。

ま、あいつなら殺してグチャグチャにしてポイ捨てするようなタイプだから心配はいらないか。

そんなことを、僕は走りながら思う。っていうか今はそんなことを考えている暇はない。

『今回は任務として扱うよ。 枷薙篝君』

阿呆な思考ことは追い出して、冷静を取り戻した先生に言われたことだけを思い出す。

『異論はあつても聞かない。戦学の掟の一つ、自分の<チーム>所属の仲間がやられたときは、真つ先にそのリーダーが対処すべし。何？まだ<チーム>には入ってないって？候補者なんだから差別しない。というかあたしや聞かない』これを聞いて僕は横暴な先生だなとこんな時でも笑ってしまった。『一応端塚古織が消えた場所は何となく分かっているわ。彼女の制服にはGPS機能が搭載されているから。最後に消えた場所は——』

空港。

そこへ、僕は向かっている。

『卑劣な手だ。火器を操り莫大な威力を誇る彼女が飛行機に乗せられたら、手も足も出ない。特に高空を飛んでいる時はね。機体に穴を開けて自分も真つ逆さまだ』

そしてだからこそ犯人たちは空港まで彼女を連れていったのだろ。彼女の特異な能力を封じるために。

でも——……。

『任務だ。 枷薙篝君。』端塚古織を生きताまま奪還せよ。』

生きたまま、ね……。

既に殺されてたら、どうするんだよチクショウ。

『君なら大丈夫だ。だから——頑張りなさい』

そこでブツツと回線が切れた。

頑張りなさい、か……。

それって、期待の裏返しという言葉なんだよな……。だからこそ、困るんだけど。

「さてと、ついたか」

学校から空港はそんなに離れていない。自動車や自転車を探してから行くよりもこつちのほう^{はしった}が早いだろうとふんだのもこのためだ。空港には現在、戦学の方から”離陸禁止”という命令が發布されている。

ならば彼女はまだここにいるはずだ。

僕は深呼吸して、もう一度走り出した。

3

「すみません、こんな感じの女の子見かけませんでしたか？」

「さあ、知りませんねえ……ごめんなさい」

受付の係の人に、端末に入った先生から送られてきた端塚さんの写真のファイルを提示したが受付の人は首をかしげるばかりだった。ということは、どこかに閉じ込められてもしているのか？

とりあえず僕は走る。闇雲にだけど仕方がない。だって他に手掛かりはないんだし。

……葦月に頼めば、もっと早く見つかるかもしれない。探索者向けの能力でもあるしな、透視は。特に、相手が隠れている場合には。そう思ったけど——やめた。あいつを巻き込めば端塚さんの命が逆に危なくなる。

考える、僕。考えるんだ。

そこではた、と気づいた。

相手は大事にしたい^{モルモット}くないはず。能力者の誘拐のたいていの理由は研究材料。大事にすれば生きて持つていくことが難しくなる。

——だとすれば。

僕は放送室の方へ向かった。

そしてその中に駆け込む。

「すみません、そのマイクってこの空港全体に聞かせられますか？」

「え？あ、はい、そうですね……、あら、戦学の方ですね」

「はい！すみません、任務なんです！使わせてもらいます！」

法律で”戦学の生徒の任務にはできうる限り協力せよ”というのが定められているせいか、放送室にいた女の人は快くマイクを貸してくれた。

取り敢えず、深呼吸。

僕はマイクに顔を近づけた。

『えー、てすてす？聞こえてます？はい、ご存知じゃない方もご存知の方も戦学の生徒です。宜しく』

思いつきり挑発してみた。うん、ふざけてるようにしか聞こえないな。

案の定またピピッと電話がかかってきてそれが先生で「……君は何をしてい（ブチッ）そこで電話を切ってやった。

『さて、今回の事件ですが、僕の知り合い——つまりは戦学の生徒が誘拐されたんです。あ、知ってます？そうですね、便止められましたもんね。という訳で、僕は犯人を捕まえなきゃいけません。』

ここで一回すーはー。『なので、今から僕の仲間が来ます。あ、今来てないのはちょっと野暮用で用事があるみたいでね。でも30分したら来ますんで。それまで待つてください。空港は封鎖させていただきます。逃げた場合は犯人決定で。あ、そのつ能力”読心能力”なんで居場所とか全部筒抜けなんで隠れても無駄ですよ。それで心の中読んで犯人かどうか調べます』

ふう、とマイクを外した。

「かなり大胆なことされますね……」

女の人は不安そうに眉を下げた。

……うん、たしかにそうかもしれない。

でもこれで犯人たちは慌てるはず。
僕は滑走路の方に走り出した。……走ってばっかだな、僕。

第3戦 誘拐犯と任務のお達し。(後書き)

さて、次回に続きます。実は時間がなかっただけです。あと簞、結構大胆っていうか割と考えなし、かも…？

第4戦 比べる自己否定と比べられる嫉妬

1

その頃。

「……そろそろ帰ってきてもいいのに」

頬を膨らませながら葦月はゴシゴシと短剣の刃を研いだ。鈍く煌めくその刃にはなぜか葦月を安心させるものがあつた。多分、ずつとずつと一緒に任務をして、時に自分の命を助けてくれたパートナー達だから、というのもあるのだろう。いつ何時襲われてもいいように葦月は毎日刃を研いでいる。シュツシュツと子気味のよい音だけが部屋に響いた。

彼女は兄と二人暮らしだ。だからこそ、兄がいない時間というのは寂しい。凄く寂しい。

基本的には兄は気遣つてよく先に帰っていたりするので——葦月がランクSの凄腕戦士で任務が多いというのもあるが——葦月一人というのは珍しい。というか、ほとんどない。

特に、こんなに遅くなることは。

「兄様、いつ帰ってくるんだろうね……？」

葦月は短剣に話しかけた。勿論刃は何も言わない。ついでに、傍から見れば物に話しかけている危ない少女なのだが、幸い誰も見ていない。——と、葦月だけが思っていた。

実際には、少し遠くで葦月の動向を見張る女たちがいたのだが。

「あーあ、折角今日は沢山豪華なもの作ったのにつ！もう、もうもう、絶対帰ったら刺し殺してやるんだから！」

……一応言っておくが、葦月にとって、兄に対する”殺す”という言葉は、愛情表現の一種である。愛しすぎて殺してしまった、の

一歩手前というところか。

いつも際どい線を言っているの、篝は毎日恐怖しているのだが。『……電話にもでないし。学校も”知らない”の一点張り。ま、そりゃ兄様を監視してるものなんて居ないだろうけど……』

とか言っている自分は監視されていたりする。

葦月は「っ」と溜息をついて短剣をスカートの下につけているベルトにさした。こうやって葦月は短剣を仕込んであるのである。

よし。葦月は頷いた。

「兄様を探しに行こう」

そして、その瞬間女達が動いた。

2

取り敢えず言っておこう。増援なんてこない。

それは先生にも言われた。うーん、来たらいいのに。

でも現実はそのな甘くない。

それに、今回はかりは、僕だけの方がよさそうな気がする。

「さーってと、どこかな」

滑走路についた僕はきょろきょろとあたりを見渡した。うむ、広い。ここからどうやってどこから飛ぶかわからない飛行機を見つけるといふのだ。

……ま、自分で提案して自分で決行した作戦だから、ちゃんと頑張るけどね。

ついでに、僕の作戦はこうである。

『挑発して脅して飛んだ飛行機が犯人』……考えなしとかいったやつ拳手。

どうせFランクだしね、この程度しか思い浮かばないことが残念でたまらない。……心の底から言ってるよ。多分。

きつと葦月ならささつと問題を解決してささつと帰ってきて晩ご飯をちゃちゃつと作って普通の日常に帰ってしまうのだろう。

でも、僕は違う。

葦月とは、違うんだ。

君とは、違うんだよ葦月。

だって僕は、出来損ないなんだ。

「……うわ」

……何変なこと考えているんだ僕。しつかりしろ。今は任務中なんだから。

にしても、こんな大雑把な作戦で犯人は動いてくれるのだろうか。「動いてくれなきゃ困るけどね」

僕がそうつぶやいたとき——ゴオオオオオ、と轟音が近くから聞こえた。

——見つけた。

「ふん、なんでこういう時だけ運がいいんだろうね、僕」

2百メートル程先にあったジャンボジェットがエンジン音を出していた。そして、その中に数人の人影が乗り込む。その一人が、女の子一人入りそうな大きさの鋼鉄の箱を手に入っていた。

多分、あの中に端塚さんはいる。

こんな時、何か能力があればいいと思う。例えば葦月なら、ちゃちゃつと敵を倒して端塚さんを連れて帰る。

でも、残念ながら僕にはなんの能力もなく、今持っているのは前葦月から取り上げたまま何となくポケットに入れておいた短剣と、義務のように身に付けている拳銃のみ。

……本当に考えなしだな僕。

でも、こんな装備ならやれることは限られているので、それはそれでいいのかもしれない。無駄に選択肢が有りすぎていざとなつて選べなくなつたら困るし。

この場合、やることはただひとつ。

「さて、いっちょ乗り込みますか」

久々の、人助けのためにね。

3

僕は別に”^{スパイ}諜報員”系の訓練は受けていないので、特に飛行機には詳しくはない。でも、通常の常識レベルなら知らないこともない。ガチャガチャと——鍵開けの技術は戦学で習った。ついでに、なぜかこれは結構成績が良かった。——ハッチを開け、中に忍び込む。やっぱり——。中は貨物室だ。

貨物室には何も入っていなかった。当然か。僕はピピッと端末を操作して、先生に電話をかけた。

「ん——ああ、枷薙君か」

先生はすぐに電話にでた。僕は（流石に壁一枚隔てているのでないだろうが）声もれないように小声でいう。

「はい。あの……端塚さんが入っているであろう鋼鉄の箱を発見。ついでに、それが運ばれたジャンボジェットに侵入成功しました」

「お、良かったじゃないか。……って、ん……？ 鋼鉄の壁くらいなら端塚さんは破れるんじゃないんじゃないかい？」

「さあ……」いや、なんとなく予想はついてるけど。『特殊な素材か、それかもしくは見間違いかもしれません。でも、僕はさっき放送で”今外に出た奴は犯人”といったんです。それで今出ていこうとしてるんだから犯人でしょう』

ふうん？ 先生は多分向こうで首を傾げているのだろう。ちよつと声が遠くなった。

「ま、頑張りなさい」先生の十八番だ。”頑張りなさい”、ね。

「できうる限りそうしますよ」

僕はそう言つて、それから切った。さて、ここには居ないようだから、客席の方にいかなければならない。

ちよつと歩くと多分客席に続いているだろう扉があったので手に

かけた。ガチャガチャと鍵開けの技術を使いそれを開く。

そろー、と扉を開く。……まじかよ。

今僕がいたのは客席の通路のと真ん中だった。成程、ここに繋がっているのか。でも、隠れる場所がない。一応椅子の後ろが隠れる場所というならあるにはあるが。

まあ、操縦室とかに出ていくよりはマシか。いやないかもしれないけど。

キョロキョロと辺りを見渡して、誰もいないことを確認すると僕は外にでた。

さて、どっちに行けばいいんだろう。右でいいや。

我ながら適当だなあと呆れつつ右へ進む。ゼーンしーん。

「だから何のキャラだよ」

自分の突っ込むのも結構恥ずかしいんだぞ。

僕は自分で決めたとおり右に進む。沢山の客席。普段は客で埋まっているんだろうか。

そんなことを思っていると――

「ッ！」

咄嗟に椅子と椅子の間の隙間に体を隠した。――やばい。物凄くやばい。

男二人がこちらへ話しながら歩いてきていた。

「しかし結構聞いてたよりは簡単だったよなー、能力者狩り」

「ヒヒっ日本はただの法螺吹きだったりしてな」

「あれがかなり優秀な奴の一人なんだとよ」

これは――英語？

英語か、一番特定しにくい。万国共通語だし、カモフラージュとして使われることも多い。

でもとにかく、今はこちらへ歩いてきている二人の男の対処だ。声はどんどん大きくなっていく――ドクドクと心臓の鼓動が早くなる――駄目だ、駄目だ、まさか端塚さんさえ助けていないのに――落ち着け、落ち着け。授業で習っただろう？――そして、葦月な

ら、こういう場合。

……そうだ。

葦月なら、殺すだろう。

不意打ちだ。僕の覚悟は決まった。仲間を呼ばれる前に、早く。

バツと通路に飛び出た。男達の目には驚きが現れる。その、前に。

「ごめん」

グサツ、そして。バンツ。

右には短剣を、左には拳銃を。

体を突き刺す鈍い音と、布に押し当てられてぐもった発砲音。

二人の体はあっけなく崩れ落ちる。

「……………」

僕は黙ってそれを見て、体から短剣を抜き出し自分の服で拭った。

二人、殺してしまった。

短剣の方とはかく、拳銃でやられた方は多分、助からない。

僕は震える体を押し止め、齒を食いしばって——さらに、続きを

歩きだした。

だって、それが任務だ。

端塚さんを救わなければ、ならないのだから。

第4戦 比べる自己否定と比べられる嫉妬。（後書き）

葦月、かなり引き合いに出してますね。それほど篤にとって葦月は大きい存在だったります。篤にはかなりの”人間らしさ”と少しの”異形”を混ぜた、自分の中でも結構特異なキャラだったり。葦月に対する嫉妬は、”人間らしさ”をかなり顕著に表している部分だと。二人の関係は分かりやすいようで分かりにくいですね。

第5戦 無表情少女の意思と義理妹の愛

1

最初は震えが酷く歩きづらかったものの、少し立つとちょっとだけだがマシになった。

今は人にあいたくないな……、できうる限り。

僕はさらに進み、人に見つからないように中を調べていく。

と――。

鋼鉄の箱を見つけた。

「……！」

僕は慌ててそれに近寄る。あまりに吃驚して周囲を警戒するのを忘れていたのを思い出し、キヨロキヨロとあたりを見渡した。誰もいない。

こんこん、と面を叩いてみた。

「あの……端塚さん、いる？ 簞……枷薙簞だけど」

ランクAの戦士ならきつと鋼鉄の壁でも気がつくはずだ。何といつても僕は練習場に行ったとき彼女は僕に気がついて、僕を出迎えたわけだし。

そして、僕の予想はあたっていた。向こうからも、こんこんと返される。

『わ……はじ……おり、な……いる』

ほとんど聞き取れなかったが多分内容は”私は端塚古織。なかにいる”だと思う。言葉は聞き取りにくかったものの声自体は結構聞こえていたので断言できる。大丈夫、余程声帯模写がうまい人でなければこの子は端塚さんだ。

僕はホッとして――それから、「出られる？」と聞いた。

数秒の沈黙。端塚さんは、一体何を考えているのだろうか。

そして、『……むり』と返ってきた。

……はあ。

鋼鉄の箱には、よく見ると鍵が上の方についていた。……かなり複雑な鍵だ。多分、僕の鍵開け技術では開けられないだろう。

よし、じゃあ鍵を探せばいいわけだ。

ま、言うほど簡単ではないけれど。

「どこに鍵があるか分かる？」

『……、あ……つら、そ……じゅう……つに……ける……った』

”あいつら、操縦室にかけると言っていた”。てことは、僕は操縦室にいかなきゃいけないってことだ。

「わかった、ちゃんと助けるから。もし出られたなら行って」

『……った』分かった、らしい。

僕は座席のポケットまで行って、そこに入っている何冊かの雑誌を取り出した。あ、あった。

飛行機の見取り図。

僕がいるのは結構前側——つまり、操縦室に結構近いらしい。

これは好都合だ。さっさと終わらせてさっさと帰ろう。

まずは鍵だ。鍵さえ奪って端塚さんを救えば——後は手に取るように簡単だろう。

彼女はランクAの戦士。僕よりずっと力がある。

僕は忍び足で操縦室へと向かった。しかし驚くほど人が少ない。

僕が見たとき飛行機に乗り込んでいるのは4人だった。その時既にエンジンがかかっていたから操縦室には最低一人、もしかしたら二人はいるかもしれない。

二人はもう倒した。最低でもあと残っているのは3人。もしくは4人。ま、もしもあの4人以外が乗ってきていたら別だけど。

拳銃には一応まだ弾が残っているし、短剣だって葦月仕様のかなりのものだ。……多分、いける、と思うんだけど。

溜息。あーめんどくさい。

その時、「おい、お前何している!」ゲッ……。

男が僕に掴みかかろうと走ってきた。僕は3つの提案を自身にだす。一つ、逃げる。二つ、戦う、三つ、無視する。

逃げるってどこに。無視するってどうやって。

という訳で僕は二つ目の選択肢戦うを選択した。でも選択したからといって何が変わるというわけでもなかった。ゲームじゃないし。操縦室はもう目に見えてきている。ここで発泡音を出すのはやばい。

そう思って僕は短剣を取り出した。

男は多分考えなしで動いている。そこで気づいた。こいつ、飛行機に乗り込んでいたときに見た。たしか、端塚さんの入っている箱を持っていた奴だ。

男が両手を振り上げて僕に殴ろうとする。——馬鹿だな、腹が無防備過ぎ。

「ぐおおおっ！！！」

僕が短剣を突き刺すと男は悶絶して転がった。そのとき、何かが落ちた。僕はすかさず首に手刀を叩きつける。男は意識を失った。

はあはあと息が荒くなったが、どうやら一人倒せたらしい。と、あれ？

「何だこれ……」

男が転がったときに落ちたものを拾い上げた。——これは、鍵？……もしかしたらこいつは操縦室に鍵を届けに行っていたのかも。しれない。好都合だ。

僕はできるだけ早足で端塚さんの入っている箱までたどり着いた。周りには誰もいない。

可笑い、と思う。やっぱり、僕の疑惑はあたっていたのだろう。そう思いながら端塚さんに「ただいま」と声をかけた。

「鍵、見つかったよ」

「……った……」

僕がガチャガチャと鍵を開ける音だけが無性に響いた。

そして、数票後。

「……そと」

端塚さんは箱から出てきた。そして、僕にむかってぺこりと頭を下げる。

「……あり、かと……」

「いや、いいんだけどね、任務だし。それより、聞きたいことが――」

その時、ガクリ、と機体が揺れた。

……まずい。

ゆっくりとだが――動いている。

滑走路を動くつもりか。

このままだと、飛んで、しまう。

2

葦月は女達に腕と足を拘束されていた。

「……あなたたちは」

葦月の問いに、女達の一人が答えた。

「私達は名も無き奴隷でございます。わたくしたち戦士育成防衛機関付属学園所属の“番犬”――こう言えば、お分かりいただけるでしょうか」

その名を聞き、葦月は忌忌しげに顔をしかめた。

「で、汚い下水育ちが何の用件なのですか？」

「……お言葉を、慎んでくださいますよう。私達は貴方様が”枷籬葦月の任務の邪魔をするときは止めよ”という命令を下されましたので、それを実行しにきただけでございます」

「兄様は、そんなに”危険”で”重要”な任務を？」

ギリ、と歯を食いしばる。

葦月の問いに、いいえ、と番犬は答えた。

「今回はただの”能力検査”なのだそうです。……私達に答えられるのはここまででございます。どうか、大人しくしておいていただ

ければ――」

「そう、ならもう用はないのですよ」

その瞬間、葦月は女達の後ろにいた。
なつと動揺が走る。

「あなたは人間と自身の体は通過できないはずでは！」

「何を言っているの？」

葦月は笑う。

それは、強者の微笑み。

それに、女達は怯んだ。

「敵”に、自身の能力を全てばらすわけないでしょう？」

3

「参った……早く逃げよう」

「にげる……ここから、でる？」

「そういうことだ」

また大きくガクンと揺れた。うわまじでやばい気がするぞ。

僕は端塚さんの手を掴んで一番近くの扉まで走った。飛行機はどんどん加速している。早くしないと。

扉の鍵をガチャガチャと開ける。端塚さんを何を思っているのだろうか、無言で僕の方を見ている。

そして、一際ガチャ——という音がして、扉が開いた。よし。

「行こう」

「……いく、どこに」

「勿論、学園にまずは行かないとね。先生達に報告しないと」

「ほう、……こく」

飛行機はまだそれでも速度は遅い。今なら大丈夫。飛び降りれる。僕が手を差し出しても端塚さんはそれをとるのを躊躇っているようだ。

……やっぱり、そうか。

「ねえ、端塚さん——ううん、古織ちゃん」

「……わたしは、こおり」

「そうだ、君は古織ちゃんだ。……あの人たちに捕まったのは、わざとだよな？」

古織ちゃんはしばし迷って、それから小さく頷いた。

そう、ずっと僕が思っていたこと。

僕程度が倒せる相手が、古織ちゃんを誘拐なんて出来る訳がない。そしてそれが誘拐されたということは——わざとしか、考えられない。

「何が嫌だったんだ？あの学園から抜け出して、モルモット研究材料でもいいから自由に——いや、厳密には自由じゃないけど——になりたかった理由は」

僕の問いに、古織ちゃんは「……、」深く考えたような目付きになって、それから言った。

「わたし、りよう、される。いやだ。わたし、もう、あきれた。わたしは」

そう、わたしは——

「わたしは、どうぐなんかじゃ、ない」

それがランクAの、僕なんかじゃ手の届かないところにいる、それでもちっばけな少女のちっばけな理由だった。

これは我儘か、反抗か、なんなのは多分本人にすら分かっていないだろう。

ただ、嫌だったただけなのだ。きっと。

利用されるのが。

道具になることを、強要されるのが。

「……そっか。そう、だよな……」

「それでも、あなたは、ここから、にげる、いつの？」

古織ちゃんは僕に尋ねた。真剣そのもの、という顔で。

そして僕は——それに答えるように、真剣に頷いた。

「ああ。利用されるのが嫌なら、僕が言うよ。道具にされるのが嫌なら、僕が守るよ。だから」

ねえ、だから。

「自分の意思で、全てを決めて」

そうしてもう一度僕は手を差し伸べた。

その時、「オイ、こっちにあの能力者と知らねえクソガキがいるぞ!」という声が聞こえてきた。

時間がない。本当なら、すぐにでも連れ出して飛び降りるべきなのだろう。

でも、僕は嫌だった。

この子に、全てを決めさせようと思った。

そして、古織ちゃんは。

「わたし、あなたと、いつしょに行く」

僕の手をとって、自ら飛び降りた。

二人して綺麗に着地する。

男達は騒いでいるようだが、飛行機が止まって僕たちを追う前に僕は――僕たちは、駆け出した。

自分達の居場所へ帰るために。

「……本当に、良かったのか?」

僕は走りながら古織ちゃんに言った。

そして、古織ちゃんの顔を見た。そして、息を呑む。

古織ちゃんは――笑っていた。

「だいじょうぶ。あなた、いる。あなた、わたしをどうぐにしない。あなたを、わたし、しんらいする」

舌足らずな口調で、古織ちゃんは言った。

「わたし、あなたのくチーム>にはいる。あなたを、主とよぶ」

こうして――

「よろしく、主」
リーダー

こうして、端塚古織は僕たちの<チーム>の一員になった。

4

空港から出てきたら、先生となぜか葦月がいた。

先生は嬉しそうに僕を褒めた。

「よくやった、君ならできると信じていたよ」

「はあ……有難うございます。あの、あいつらは」

「ああ、番犬スレイクがあたっている。さっき鎮圧したところだ。君が刺したり撃った人間の中に死んだものは居ないそうだ」

「……お気遣いどうも」

やっぱりお見通しだったのか。

よかった、と安堵して古織ちゃんを先生に引き渡した時だった。

僕の脇腹に、短剣が刺さった。

「う、ぐあ……っ!」

鋭い痛みには僕はあえなく崩れ落ちた。

……その犯人は、僕に駆け寄って、それからさらに僕のほっぺをひっぱたいた。

痛いぞ義理妹よ。

「兄様は馬鹿ですか!なんで本当にもう今度から任務のときは私を呼ぶようにしてください!」

「あー、ごめんって」

「全然誠意がこもってないのです!」

今度は違う脇腹に刺激が。刺さってる刺さってる。

……なんで任務では傷一つおってないのに任務終了後にかなりの大打撃をくらってるんだよ僕。

「それに変な女と手つないで走ってたし!」

「変な女とは失礼な。今度から、僕らの<チーム>に所属する古織ちゃ——」

「死ねえー！！！」ブスブスブス、と僕の脇腹にだから刺さってる刺さってる。

そついや僕も敵への攻撃に脇腹をさしてたな……。さすが兄弟、似るのか。

こんな所で似ても全然嬉しくないけどな。

取り敢えず葦月からはなれよ「おっ？」押し倒された。

僕は地面に仰向けに倒れ、葦月は僕の上に馬乗りになる。

そして、短剣を振り上げながら言った。

それは、いつも感情が昂ったときに葦月が言う、癖みたいなセリフだ。

「殺したいほど愛してる」

だから僕も言った。

「知ってる」

そしてとどめとばかりに鎖骨の横あたりにグサリと刺された。

あまりの痛みに悲鳴をあげそうになるのを堪えながら先生にいった。

「あの、先生」

「なんだい？とりあえず教師の前でイチヤイチャするのはどうかと思っよ」

「そうではなくてですね——あの、救急車呼んでください」このままだと僕死にますって。冗談抜きで。

先生は笑って答えた。

「もう呼んでる」

こうして、僕の初の単独任務は、（義理妹のせいでいらぬ血を流しつつ）無事に終わったのだった。

ついでに、あの後出血多量でぶっ倒れてようやく来た救急車に運ばれたのは別の話である。

第5戦 無表情少女の意思と義理妹の愛（後書き）

いいところは義理妹が全てをかつさらっていく。
さすがメインヒロイン、お見事です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7380y/>

キャパシティ・ワールド—能力者達の世界—

2011年11月26日22時55分発行